



追悼 エリザベス英国女王

国際政治における ソフト外交の体現者

Elizabeth Alexandra Mary

(1926年4月21日～2022年9月8日)

ヨーク公アルバート王子(後の国王ジョージ6世)とエリザベス妃の第1子として誕生。1947年に、フィリップ・マウントバッテンと結婚し、4人の子をもうける。52年父である国王ジョージ6世が崩御し、25歳の若さでエリザベス2世として英国女王に即位。以来70年にわたり君臨した。

2015年6月にエリザベス女王の誕生日を祝うセレモニー。バッキンガム宮殿のバルコニーに王室4代が初めて並んだ。左からカミラ夫人、チャールズ皇太子、ジョージ王子を抱くウィリアム王子、エリザベス女王、その後ろにキャサリン妃、ヘンリー王子、1人子どもを置いてフィリップ殿下(肩書は当時)(Shutterstock／アフロ)

関東学院大学教授 君塚直隆

きみづか なおたか 一九九七年
上智大学大学院文学研究科博士
後期課程修了。博士(史学)。専
門はイギリス政治外交史、ヨーロ
ッパ国際政治史。著書に「エリザベ
ス女王」「悪党たちの大英帝国」「立
憲君主制の現在」など。

「私の人生は、それが長いものになろうが短いものになろうが、私たち皆が属する帝国という大いなる家族への奉仕に捧げられることをここに宣言いたします」。

大いなる家族への奉仕

これは先日亡くなられた、イギリスのエリザベス二世女王（一九二六～二〇二二）、在位一九五二～二〇二二）が二二歳を迎えた一九四七年四月二日に、家族とともに訪れていた南アフリカ連邦（当時はイギリスの自治領）のケープタウンから、ラジオを通じて世界の人々に語った言葉の一節である。第二次世界大戦が終結してわずか二年後に、当時まだ王女であったエリザベスは、父ジョージ六世（在位一九三六～五二）、母エリザベス王妃（後のクイーンマザー）、そして妹のマーガレット王女と一緒に、初めて海外公式訪問の旅に出た。その行き先が南アフリカだった。

その当時のイギリスはまだかろうじて「大英帝国」と呼べる巨大な領土を誇っていた。しかしエリザベスのラジオ放送から四ヵ月後に、「帝国のなかの帝国」といわれたインド帝国が解体され、各国へと独立した。さらにエリザベスが一九五二年に王位に即いて君臨するあいだに、アジアやアフリカなどでも次々と植民地が独立していった。

とはいえ、この時のエリザベスの言葉に嘘偽りはなかった。彼女の人生は、一世紀にも近い九六年もの長きにわたったが、この間に彼女が海外を公式に訪れた回数は一三〇にも及び、訪問した国の数は一二八カ国となった。非公式の海外訪問まで合わせればもっと多くなり、自身が女王を兼ねるカナダには二二回、オーストラリアには一六回訪れている。のべにすれば三五〇カ国を訪問した。それは地球を四二周した計算になる。

まさに現代世界で「最高の外交官」ともいべきエリザベス二世が、戦後七〇年の国際政治のなかで果たしてきた役割とは、どのようなものであったのだろうか。

ソフト外交の強み——継続性と安定性

エリザベス女王に代表される「王侯貴族」が、二一世紀の今日において現実の政治や外交の世界で果たす役割は「ソフトの政治外交」と呼べるだろう。本誌『外交』で頻繁に取り上げられているような、私たちがよく知る政治外交とは、各国の政府指導者や官僚、そして職業外交官らが展開する「ハードの政治外交」である。実際に、国と国との間で条約や同盟を結び、お互いの国境線を画定し、場合によっては戦争と平和に関わっているのは、このハードの

方である。それに比べれば、ソフトの側は現実の政治外交においては特に大きな役割を果たすことはない。しかし、現実の外交を司るハードとハードは、とかくぶつかりやすいものだ。それが激しさを増すと、首脳同士の会見すら実現できない。昨今の日中関係、日韓関係がそれをよく物語っている。

しかし、ソフトの外交は「緊急に特に何かを決めなければならぬ」ということがない。だから首脳同士でいつでも会えるし、そのおかげで相手国との関係をつなぎとめておくこともできる。外交とは「会う」ことから始まる。会わなければ外交そのものが動かない。その点でも、ソフトの政治外交とは、国や国民にとって「継続性と安定性」をもたらす、きわめて貴重な存在なのである。大統領が大きな権限を持つ共和制国家の場合には、この棲み分けができない。トランプ大統領時代のアメリカを見れば一目瞭然であろう。

戦後七〇年のイギリスでこのソフトの外交を担ってきたのがまさにエリザベス女王陛下であった。

戦後のイギリスは、大戦の戦勝国であったにもかかわらず、まるで敗戦国であったかのように経済は疲弊し、アメリカによる経済援助なくして復興は実現できなかった。か

つての「植民地」アメリカは、いまやイギリスを「一番の子分」のように従え、大戦終結とともに始まった米ソ冷戦において「特別な関係」を構築していった。

こうしたアメリカとの関係ひとつをとってみても、エリザベス女王が果たしてきた役割は大きい。彼女が初めてアメリカを訪れたのは一九五一年のこと。歓待してくれたのは、ハリー・トルーマン大統領だった。女王としての初の公式訪問はその六年後の五七年。その前年に、イギリスはスエズ危機でアメリカと衝突し、珍しく英米関係が悪化していた。このような折に女王が訪米した意味は重要だった。迎えてくれたドワイト・アイゼンハワー大統領は、彼女にとっては「大戦での戦友」だった。これを機に英米関係も修復された。

バラク・オバマ大統領が政治家を志した理由の一つが、彼自身が誕生した六一年に大統領に就任したジョン・F・ケネディを尊敬していたことにあったのはつとに知られている。そのケネディを、大統領に就任してはやはやの六一年にバックingham宮殿で接遇したのが、ほかならぬエリザベス女王だった。それからちょうど半世紀後の二〇一一年、同じ宮殿での晩餐会の席で女王の隣に座ったオバマ大統領は、この「現代国際政治の生き証人」ともいえるべき小柄な

女性を、終始尊敬の眼で見つめ続けていた。

次代の大統領で「強面」で知られたドナルド・トランプも同じだった。相手が女性首脳であろうが平気で不作法な態度をとるトランプ大統領は、二〇一九年にバッキンガム宮殿で接遇された際には、いつもと違って「神妙な面持ち」になっていた。

国賓がイギリスを訪れるとき、その初日には宮殿で軽い昼食をとり、そのあとは別室に移って、王室が所有している両国にゆかりのある品々を鑑賞するのがならわしである。トランプ訪英時にも、女王の両親が一九三九年六月に訪米した際、フランクリン・デラノ・ローズヴェルト大統領夫妻が大歓迎してくれたときのアルバムや、四四年六月六日にアイゼンハワー將軍がノルマンディー上陸作戦の成功をジョージ六世に知らせた電報など、貴重な品々が陳列されていた。

「一九四六年生まれ」のトランプ大統領もまた、自身が生まれる前から歴代大統領と親しく、自分が歴史の教科書でしか触れたことのないトルーマンやアイクを知るこの女王陛下に、あらためて敬意を示したのは言うまでもない。

大統領や首相には任期がある。しかし「女王」（君主）の場合には、基本的に亡くなるまで在位するものである。

エリザベス女王が七〇年にわたってイギリスに与え続けてくれた「継続性と安定性」の根源が、ここに垣間見られよう。

アパルトヘイトの廃止に取り組む

今現在、世界には二八の君主国がある。そのなかでエリザベス二世が、他の君主たちと大きく異なっていたのは、彼女が「コモンウェルス（旧英連邦）」の首長も兼ねていた点にある。コモンウェルスとは、かつて「大英帝国」の植民地であった国々が、自治領や独立国となった後も、イギリスやその他の国々との関係を保ち続ける共同体のことである。現在、五六カ国がメンバーとなっており、なかにはルワンダやガボンのようにイギリスの植民地ではなかった国々まで含まれている。

南極以外のすべての大陸や、カリブ海、南太平洋にまで広がるこれらの国々は、二年に一度ずつ首脳会議（Commonwealth Heads of Government Meeting：CHOGM）を開催している。このような会議形式になったのは一九七一年からのことであり、それ以前はイギリスが相変わらず「帝国意識」を振りかざし、自国の都合で各国首脳らをロンドンに呼びつけていた。しかし、イギリス自体

の経済的・軍事的な力が衰退したこともあり、各国が輪番制でホストとなり、会議も定期的に開催されるようになった。

このコモンウェルスこそが、エリザベス女王の外交人生にとって最も大切な活躍の場であったのかもしれない。その真骨頂が南アフリカ共和国のアパルトヘイト廃絶であらう。女王にとっては皮肉なことに、一家で南アフリカを訪れた翌年、アパルトヘイトが法制化された。南アフリカ連邦の首相は、コモンウェルスの会議に出るたびに非白人系の首脳らから非難を浴びるようになり、ついには一九六一年に南アフリカは共和国となり、コモンウェルスからも脱退した。四年後にはすぐ北の南ローデシアも同じ道をたどった。その南ローデシアにおける人種差別政策を転換させようと動いたのが、さらに北隣にあるザンビア（旧北ローデシア）のケネス・カウング大統領だった。七九年のCHOGMは彼がホストとなり、ザンビアの首都ルサカで開催された。ここで女王陛下がイギリス政府と南ローデシア周辺諸国の黒人大統領たちを結びつけ、南ローデシアは翌八〇年には黒人にも参政権が与えられ「ジンバブエ」として再生された。

そして女王と黒人大統領たちのさらなる目標が南アフリ

カのアパルトヘイトを廃止することだった。エリザベス女王は長年の信頼関係を有する先進諸国の首脳にも要請し、アパルトヘイト廃止を訴える闘士ネルソン・マンデラ釈放をめざして南アフリカへの経済制裁が強化されていく。九〇年、ついにマンデラは釈放され、アパルトヘイトもなし崩し的に廃止されていたことは、読者もよくご存じのはずであらう。

九五年、エリザベス女王の姿は南アフリカにあった。初めての海外訪問地として、家族と一緒に訪れて以来、実に半世紀近くの歳月が流れていた。女王を出迎えたのはこの前年に黒人として初めて大統領になったマンデラだった。

ハードの政治外交はいくら形を変えようとも、ソフトの政治外交になることはできない。しかしソフトは積み重ねられると、いざという時にハードに転じることができる。女王が各国の首脳たちと協力し、史上最悪の人権侵害ともいべきアパルトヘイト廃絶に成功を取めたのは、そのような現象をよく体現していたといえよう。

ブレグジットに直面して

イギリス王室が持つソフトの政治外交の力が次に発揮された顕著な事例が、二〇一六年六月の国民投票の結果に伴

う「ブレグジット（イギリスのEU離脱）」の際に見られた。翌一七年三月に、これより二年以内にイギリスはヨーロッパ連合から離脱することが決まった。ここで間髪を入れずに動いたのが当時のテリーザ・メイ首相であった。彼女はすぐさまバッキンガム宮殿に赴き、イギリス王室を総動員してEU加盟国を訪問してほしいと女王陛下に要望したのである。女王はすぐさま了解した。

当然のことではあるが、王族が各国の首脳らと「離脱」について協議するわけではない。彼らは各国首脳に女王と政府の親書を届けるだけでよい。ブレグジットに最も腹を立てたのはフランスやドイツだった。すべてを自分たちに押しつけて出て行くのかと。アンゲラ・メルケル首相など、イギリスが特使を派遣しても会ってはいくれない。しかし相手が女王陛下の孫ともなれば会わないわけにはいかない。しかも今回は「ひ孫」まで動員された。ウィリアム王子夫妻の傍らには三歳のジョージ王子と二歳のシャーロット王女の姿もあった。さすがの強面のメルケル首相も目尻を下げて二人に挨拶した。さらにウィリアム王子からは首相に親書も手渡された。あとの交渉は王子たちに同行した職業外交官らの手に委ねられたわけである。

こうして王族たちがヨーロッパ各国を回る一方で、すで

に九〇歳を超えていた女王は、スペイン国王夫妻（二〇一七年）、オランダ国王夫妻（一八年）を国賓としてバッキンガム宮殿に迎え、大歓待をした。さらにヨーロッパ諸国の接遇が一段落済むと、今度はこれまでの関係をより強化するために、アメリカのトランプ大統領（一九年）、そして日本の天皇陛下（二〇年）を国賓に迎えることとなった。ところがコロナ禍の急襲により、天皇皇后両陛下下の訪英は延期されてしまった。そして両陛下下の訪問がかなわぬまま、二二年九月八日にエリザベス女王は大往生を遂げられたのである。思えば第二次大戦で敵味方に分かれ、東南アジアにおける捕虜虐待問題などもめぐり、戦後の日英は冷え切った関係にあった。それも一九五三年の戴冠式に明仁皇太子（現上皇陛下）を招き、王族と皇族の相互訪問を実現し（六一―六二年）、昭和天皇をイギリスに招くという（七一年）女王の差し伸べた手が和解につながった。

二一歳で帝国という家族への奉仕に一生を捧げると約束した女王は、その後の七五年にわたる活動でそのとおりの人生を歩んだ。そして彼女が進めた「王室外交」のありかたは、次代のチャールズ三世、さらにはウィリアム皇太子やジョージ王子へとしっかり引き継がれていくことになるだろう。 ●